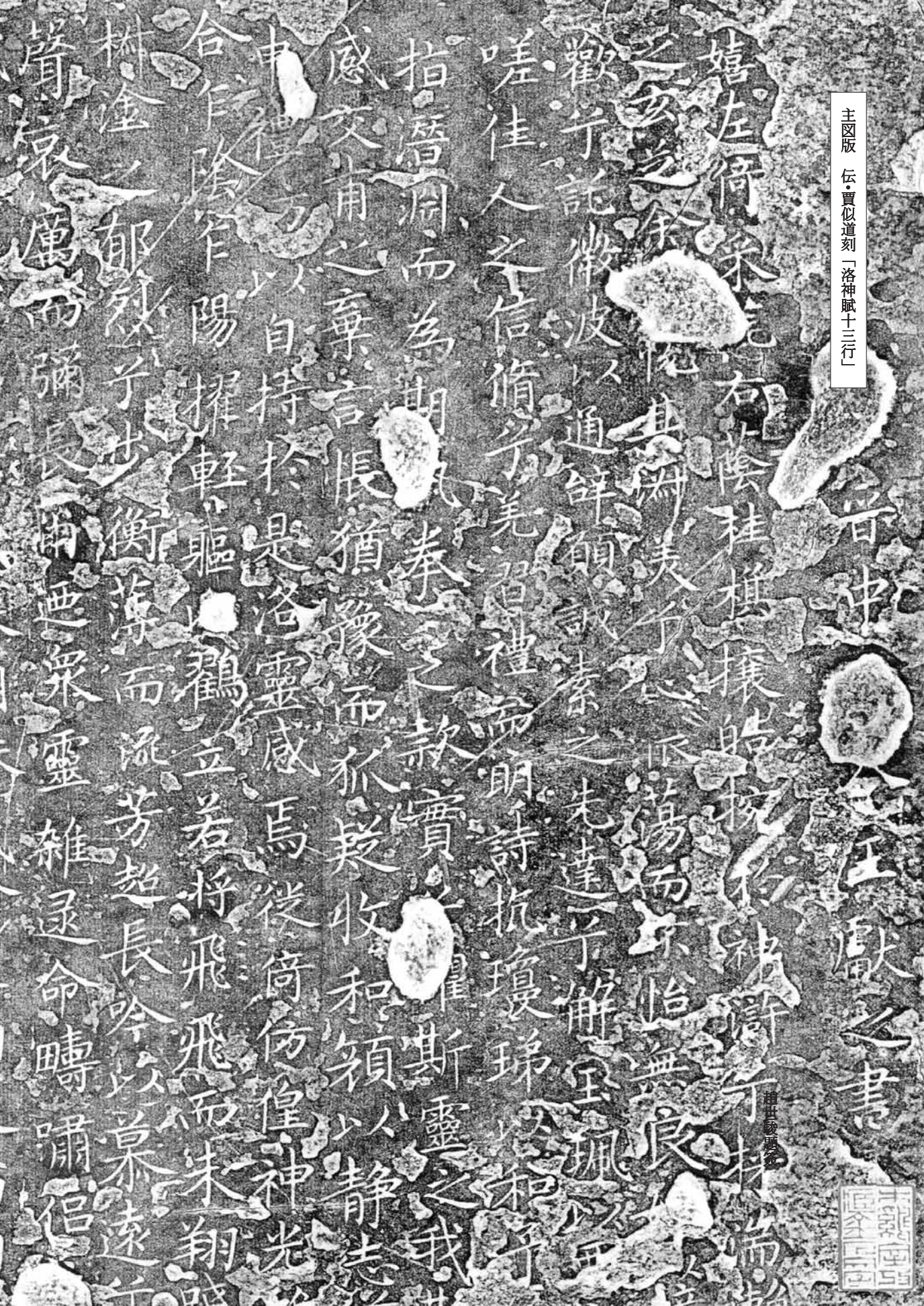
主図版　伝・賈似道刻「洛神賦十三行」



趙世駿書

「落ち穂拾い記」⑲

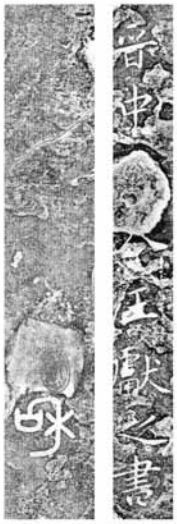
伝・賈似道刻「洛神賦十三行」上

図版①　柳公権題記

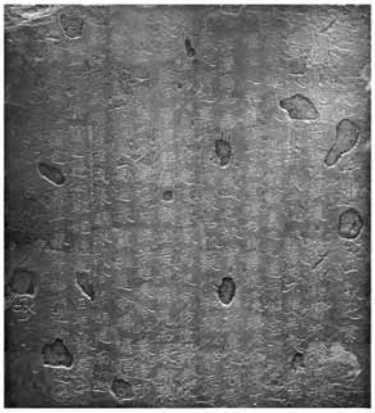
黄庭経

図版②　二王小楷比較

玉版十三行



図版③　玉版十三行・巻頭と巻末



図版④　原石写真　首都博物館蔵

図版⑤　玉版十三行・新拓本

王献之の書と伝えられる小楷の名筆に、「洛神賦十三行」がある。三国時代の魏の曹植の洛神賦を王献之が書いたとされる真跡が、唐時代には伝来したとされ、宋代に、その墨蹟本の一部13行（一行19字・全体で247字）が伝来したようである。この洛神賦十三行部分が、宋代以後の各種法帖に刻されて伝えられている。巻末に唐時代の書家としても有名な柳公権の題記が刻されている。また別に宋時代の宰相・賈似道が玉石に刻したとされるものがあり、柳公権の題記本と玉版の2系統が伝えられている（図①）。王羲之の小楷とされる『黄庭経』などとは異なり、伸びやかですっきりした趣を示している（図②）。共に本文の書風や文字配置は同じであるが、前者は巻末に柳公権の題記が刻され、後者の賈似道本は、この題記がなく、巻頭に本文と同じ書風で、「晋中書令王献之書」の一行があり、巻末に篆書で「和」字が刻されている（図③）。今回は、多くの手本に採用されている玉版系十三行を取り上げよう。

北京の文物商店の慶雲堂が天壇公園の中に移転して営業していた1980年代の初め頃、店内で秦公氏から玉版十三行の原石を見せられたことがあった（図④）。縦横とも30㎝足らず、厚さ1㎝あまりの端渓石風の石版であった。手に取りあれこれ見た記憶がある。その時に以前目にした王壮弘の『崇善楼筆記』に、原刻石は上海博物館に入ったとの記事を覚えていたので、目の前にあるのは、原刻石ではないのではと。すると秦公氏は、上海博物館に入ったものが戻され、それがこれだと。半信半疑であった。店を去るときに、この石の拓本を1枚頂いた（図⑤・主図版）。帰国して、慶雲堂で手にしたのが原刻石だと認識した。その後、宋の宰相・賈似道の刻した洛神賦十三行の原石であるとされ、北京の首都博物館に国宝として収蔵されている。古くには、王献之の名筆を刻した石を尊び、玉の石と言い伝えられたのであろう。小さな刻石であるために幾種もの翻刻拓本が制作され、原刻と翻刻の区別がつけ難いものには、青玉版、白玉版などの名も付けられたが、玉石ではなく、茶褐色の端渓石に似た石であった。中国のネットにも首都博物館蔵の原石写真の鮮明な図版が数多く掲載されている。また原刻拓本でない翻刻拓本が、原石図版などと共に堂々と並べられているものもある。右頁の主図版は、当時頂いた精拓本の一部をほぼ原寸で示した。

伊藤滋（書斎名・木鶏室）

書のひろば

理事長　下谷洋子

書道芸術院秋季展
併催「書道芸術院前衛書展」

秋晴れが続く中、本院主催の書道芸術院秋季展が、10月8日から13日まで、セントラルミュージアム銀座で開催されました。今回の併催は、新しい企画として「書道芸術院前衛書展」と銘打ち、アートサロン毎日で行いました。

主会場のセントラルミュージアム銀座には、本院財団役員（顧問・理事・監事・評議員・参事）、2月本展の特別賞選考に合わせて選抜された作家（春華賞候補）、新審査会員、審査会員候補公募（296点172名より選考）の作品が展示されました。

今回も、公募他の作品は下見会を経ての出品となり、各々の先生方のバラエティに富んだ作品群は芸術院ならではで、入場者も若干増えました。

12日には、秋季展公募の表彰式及び前衛書展の大作出品者による研究会も行われ、終了後は会場を2階に移し、財団役員他多数の会員の出席を得て、祝賀懇親会も行われました。

ご来賓には毎日新聞社の田中義郎様、毎日書道会の竹下享子様がお見えになりました。

秋季展表彰式

アートサロン毎日での新企画展は、前衛書部主導により行われ、前衛を擁する各地域から選抜された中堅作家の作品が展示され、これは来年も継続し、2年にわたり行われます。同じく12日、会場にて研究会を催し、奎星会会長中原志軒先生、毎日書道会顧問西村修一様を迎え、会場が溢れるほどの熱気に包まれました。

（両展とも詳細は5ページから掲載）

企画委員会開催

10月11日秋季展開催中に、今年度1回目の企画委員会が開かれました。新メンバーになって2年目ということもあり、各総局支局の近況報告のみならず、多様な意見が出されました。今後の本院の活動に参考にさせていただき、反映可能なものは、取り入れていきたいと思っています。

企画委員会

第58回書道芸術院単位認定講習会
東京にて開催

10月20日、本年度2回目となる単位認定講習会を、東京文具共和会館にて開催しました。

これまでの単位認定講習会を、今年は1日講習とし、会場の関係もあって、東西で行うことにしたため、2回目は東京での開催となりました。講義内容や講師は8月の岡山での講習会と同じですが、今回の主管は事務局でした。

参加者は書道芸術院の審査会員候補を中心に無鑑査、一般、審査会員も若干加わり67名でしたが、事務局のスムーズな運営のため滞りなく進み、熱心な受講者で講師陣も岡山とはまた一味違った熱さを発揮していました。

（詳細は次号に掲載予定）

来年度は、1回のみで南関東総局により千葉市内にて1泊2日の講習になります。

単位認定講習会　東京会場

高野山書道協会常務理事会開催

10月22日高野山東京別院にて、令和6年度高野山常務理事会が開催されました。

協議事項

- 第58回高野山競書大会の経過報告
- 任期満了に伴う役員改選について
- 第59回（令和7年度）高野山競書大会開催について
- 運営の見直しについて（事務局の現状と課題）他

10万点を超える出品点数を誇る高野山競書大会も、他展同様運営が厳しい状況に置かれています。いろいろ多面的な対策が考えられていますが、令和8年には第60回記念大会を迎えます。

本院第3代会長香川峰雲先生が発起人となって誕生した高野山競書大会へのご協力を、これからもお願いします。

本日の協議内容は、12月の理事会にて承認決定します。

漢字書基礎基本講座(6)

種谷萬城

拓本

臨書

楷書4　九成宮醴泉銘

欧陽詢（557―641年）は、潭州臨湘（湖南省）の人。姓が欧陽。名が詢。隋・煬帝、唐・高祖に仕え、後に唐・太宗に仕えた。虞世南とともに弘文館学士となる。初唐の三大家の一人。書は、直線を多く用いた、厳しい緩みないもので、冷たさを感じるほどの緊張感がある。構成は理知的で完成された美を持つ。九成宮醴泉銘は、『楷法の極則』と評される。厳正な用筆で字形が整い、楷書の完成期を代表する名品。欧陽詢の書には他に、皇甫誕碑、化度寺碑、温彦博碑などがある。

○臨書にあたっては、

1、引き締まった気分で書く。
2、筆は兼毫筆など毛質の硬めのものを使う。
3、墨はやや濃墨。墨量は少なめ。
4、鋭い起筆、速めの送筆。収筆は力強く。
5、側筆を用いて、引き締まった直線を引く。
6、字形はやや縦長で、胴を引き締めた背勢に作る。
7、手足は長く強調される画に注目。
8、余白を充分とる。

倣書「峻勁」

点画の解説

背勢　直勢　向勢

ユーチューブ『筆のサロン』に臨書と倣書の関連動画を配信しました。是非参考にして九成宮醴泉銘を学んで下さい。下のQRコードでアクセスできます。

筆のサロン
QRコード

――基礎基本講座――

篆刻・刻字基礎基本講座(6)

後藤大峰

前回は、摹刻について、所謂（いわゆる）、古典の習得の、大切な方法についてお話し致しました。

さて、愈々（いよいよ）、創作の方法です。これについては何回かに分けて進めていきたいと思います。

前回、お話を致しました摹刻を、踏まえまして、その構成、文字の粗密、書線の軽重、太細、等を考慮して、作品の大きさに沿って、所謂、草稿を創っていきます。

今回はそれについて、お話致します。

篆刻の世界では「印稿」と称します。

印稿は、最初に鉛筆などで、大まかな原形を、甲骨文、金文、小篆、印篆など時代、時代の文字の中から好みの書体を選び書きます。

これは各社中によっても違いますので、好みのもので進めて下さい。

ただし、前にもお話し致した字法という点で各時代の書体を混同しないようにしましょう。

鉛筆書きで作品の骨格が出来ましたら、今度は実際に作品の状態に印稿を創っていきます。

これを「本印稿」と言います。

本印稿の制作方法は各社中によって、様々で、筆者の所属した社中では、厚地のケント紙をハガキ大に切り、「墨と胡粉」で書き入れます。

何度か修正をしながら、実際の刻線（書線）に近いものにしていきます。

図は「長久」の字句の、上から、鉛筆書き、朱文、白文の筆者作の印稿です。

鉛筆書き

朱文

白文

書道芸術院秋季展

書道芸術院役員・審査会員選抜・審査会員候補公募

併催　「書道芸術院前衛書」展
会期　令和6年10月8日(火)～10月13日(日)
会場　セントラルミュージアム銀座
　　アートサロン毎日

秋季展実行委員長
後藤大峰

例年にない暑さの残る今秋、恒例の「書道芸術院秋季展」が本年も銀座セントラル美術館にて開催された。

今回展は例年の財団役員、審査会員選抜と審査会員候補の公募による入賞作品に加え、本年より始まった「書道芸術院前衛書展」がアートサロン毎日にて開催された。

出品点数はセントラルが全117点、アートサロン毎日では22点が展示されました。10月12日には表彰式、研究会が開かれました。それに先立ち同日の午前中にアートサロン毎日で出品者によるトークショーが下谷理事長、実行委員に加えて、ご来賓として「奎星会」の中原志軒先生を迎えて開催され、出品者、参観者の皆様にとって、有意義な時間となった。表彰式、研究会では各表彰とともに映像による作品解説が行われた。会場には「書道芸術院前衛書展」の出品者も出席、作品紹介をし、会場の雰囲気は盛り上がりを見せた。

その後、会場を移し昨年同様、懇親会を毎日新聞社、田中義郎様、毎日書道会、竹下享子様をご来賓にお迎えして行い、役員、会員が和やかに親睦を深める光景が見られました。

最終日は、2会場とも午後5時に閉会し、撤回作業も無事終了しました。次年度以降も多くの役員、会員の皆様の、ご支援、ご協力を得て、又、皆々様のご発展を祈念し、終章と致します。

秋季展公募入賞者

◇秋季菊花賞（10名）

本誌特集ページ（P7・8）に名前と作品を掲載しました。

◇秋季俊英賞（40名）

漢字　阿部雅悠　阿潟浜里佳　小澤明泉　荻田良風　金延憲市　金子美千　坂井白萩　紺野遊山　下元真世　佐茂明祥　中嶋佐緒里　谷香来　樋口玉葉　新村翠芳　山田征孝　三浦英樹　小暮真紀子　加藤万丈

かな　逸見玲子

現詩　上野千琇　伊藤四夏　下津舟楓　木村順峰　中島俊恵　千葉桂貴　舟寳恵美　藤井花香　吉田紫風

篆刻　蛇森美風

前衛　赤羽根えり奈　新井虹雪　遠藤和香　工藤史音　佐藤糾舫　関谷明美　竹内成美　鶴淵亜希　中島正美　廣田紫　藤田香園

アートサロン毎日の会場風景

2024年　書道芸術院秋季展公募出品集計

部	出品点数	出品人数	秋季菊花賞	秋季俊英賞	選外
漢字	125	73	4	16	53
かな	14	12	1	3	8
現代詩文書	58	37	2	9	26
篆刻・刻字	1	1	0	1	0
前衛書	98	49	3	11	35
合計	296	172	10	40	122

書道芸術院秋季展

会期　令和６年10月８日(火)～10月13日(日)
会場　セントラルミュージアム銀座（紙パルプ会館）

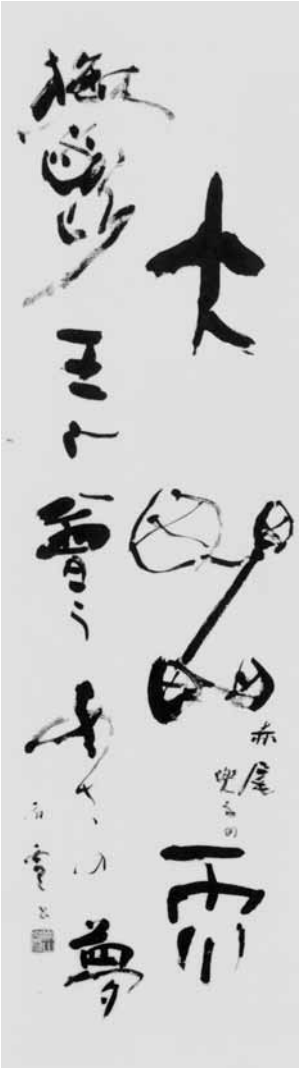
〈消えゆく光〉　理事長　下 谷 洋 子　70×83㎝

〈いのり〉

常務理事　千葉蒼玄

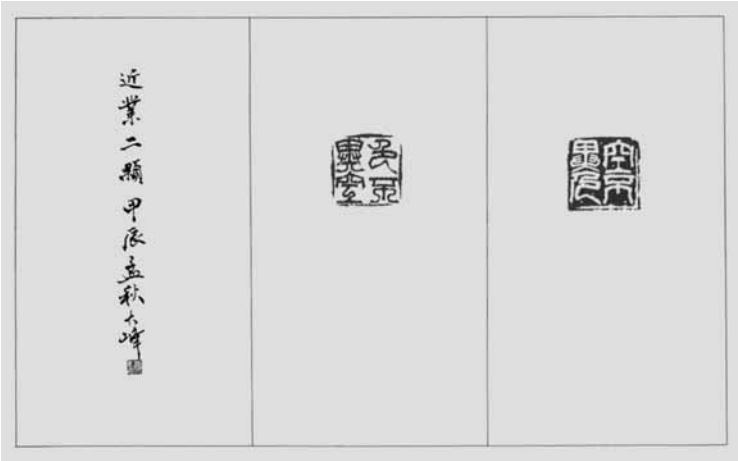
180×60㎝

〈大雷雨〉



常務理事　小竹石雲

160×45㎝



〈近業二顆〉　常務理事　後藤大峰　70×100㎝

審査会員候補 秋季菊花賞

〈赴〉 新井春麗

121×91cm

〈留まらず〉 木暮美紀

152×73cm

〈道を求めて 2024-3〉 西條松雲

182×61cm

〈かねてより〉 菅原澪花

174×53cm

〈みずまり〉 田村紅沙

182×61cm

〈馬蹄渦〉

古川彩逕

164×54㎝

〈長恨歌〉

宮崎春泉

172×51㎝

〈自適〉

日比康貴

179×60㎝

〈駈けてくほど〉

甲谷鳳梨　91×90㎝

〈東山魁夷の詩〉　笹木蒼風　90×120㎝

〈併催〉「書道芸術院前衛書」展

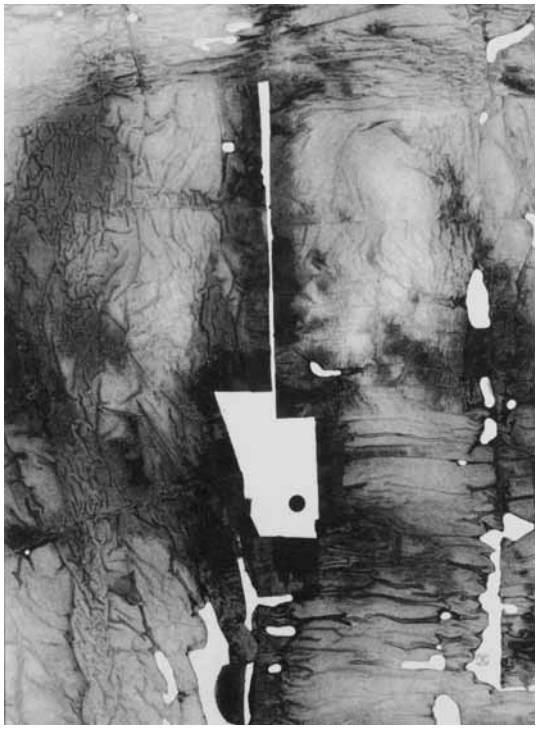
会期　令和６年10月８日(火)～10月13日(日)
会場　アートサロン毎日（竹橋・パレスサイドビル１Ｆ）

《津田海仙》

〈一滴〉

90×31㎝

《千葉蒼玄》



〈迷宮〉　36×27㎝

大作　《岩　上　郁　子》

〈命の鼓動〉　200×160㎝

大作　《佐　藤　華　炎》

〈Crossing〉　180×175㎝

大作　《塚　本　真　仙》

〈平遠〉　90×180㎝

大作　《野　口　加　奈》

〈深海Ⅱ〉　175×163㎝

《浅野彩紅》

〈颯々と〉

182×61㎝

《上田和芳》

〈息〉

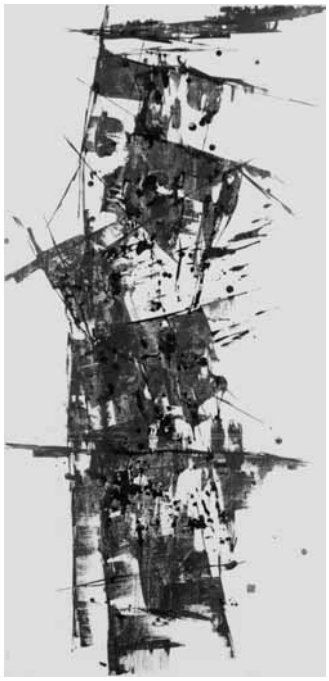
73×152㎝

《大嶋珀曄》

〈あまつかぜ〉

112×90㎝

《井上恵子》



〈地線〉

152×73㎝

《大町菜圓》

〈微笑み〉

182×61㎝

《門脇信子》

〈穏〉

180×60㎝

《木暮千晶》

〈龍舞〉

182×60㎝

《鈴木楽洋》

〈起こり〉

73×152㎝

《佐藤紅茜》

〈波による〉

180×60㎝

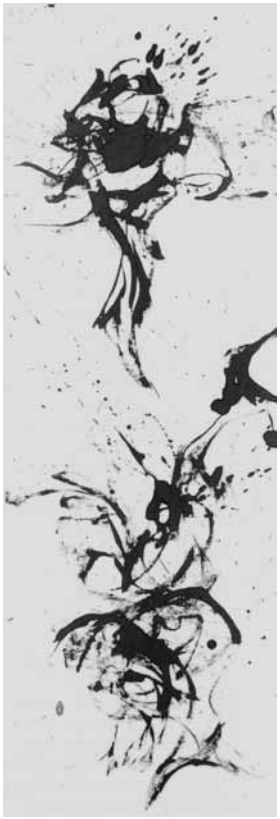
《名取雅子》

〈おもい〉

182×61㎝

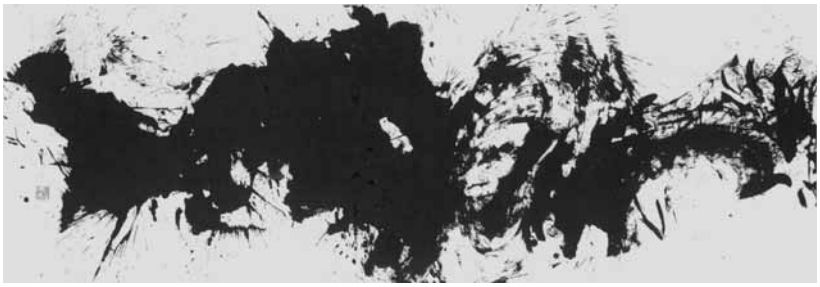
《大和愛香》

〈煌めく〉



180×60㎝

《中村雅臣》



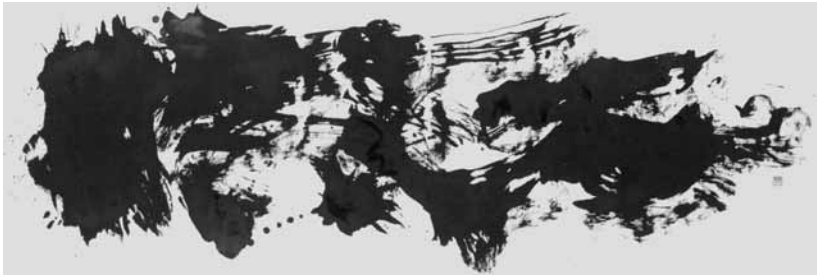
〈響き合い〉

61×176㎝

《畠　中　成　山》

〈大成―27〉　60×180㎝

《山　田　明　子》



〈行雲流水〉　61×182㎝

《福田玉翠》

〈木霊〉

152×73㎝

《柳橋香仙》

〈無による〉

136×70㎝

書に関する人材育成事業・地方開催講演会

四国支局・講師　辻元大雲先生
「詩文書講演会」

令和6年5月6日(月・祝)／セリーズ体育館
令和6年10月14日(月・祝)

報告者　川島舟錦・川村美泉

四国支局は、辻元大雲先生をお迎えして「詩文書講演会および講習会」(1)を5月6日に、(2)を10月14日に開催しました。「詩文書」に、「あこがれはあったが、機会に恵まれなかった」けれども、辻元大雲先生の講義で「剛毛、柔毛、長峰、短峰など筆の持ち味を生かして多彩な表現をしていくことの大切さ」を思い「講義に心を奪われ、気が付けば詩文書の世界観に引き込まれていた」。

また、講習会は「大きな用紙に思い思いの言葉を作品にするという時間は、あっという間だった」「受講者ひとりひとりに丁寧にご指導くださり、目の前で参考手本を書いていただき、涙が出るほどうれしかった」「先生の筆から織りなす線は、奥深く繊細。文字に命を吹き込んでいくことに感動し、本当に受講出来てよかった」。さらに「大きな感動を胸に、今まで以上に書作品づくりに励みたい」と、参加した皆さんが目をキラキラさせながら語る姿があちらこちらにありました。書道芸術院主催でお声がけいただき企画、運営した「詩文書講演会および講習会」(1)および(2)は、成功裏に終了したことをご報告いたします。

（川島　舟錦）

詩文書講演会および講習会（1）

資料をもとに①何をどう表現するか②筆の種類と線質の関係③表現のねらいと目的を定めること、についてお話をいただきました。

表現が意図、鑑賞の場、鑑賞する人によって想定されることに今更ながら気づき、心の動きを紙に表現し、見る人と共感・共鳴できることは、すべての作品づくりに通ずるもので、これからの書作に大いに参考になる講義でした。

講習会では、先生の繊細かつ大胆な筆づかいにため息が出るばかり。古典を基調にした85点もの言葉を、詩情豊かに書いていただいた作品は美しく、流動美、躍動美、抒情感にあふれるものでした。何より、エネルギッシュな姿勢に感銘を受け、辻元先生の書への情熱がそうさせるのだと、つくづく感じ入りました。

詩文書講演会および講習会（2）

今回の講演会と講習会のテーマは、「筆の種類と線質」「心に響く言葉を自由に表現できることを目指して」～表現したい作品に合う筆を選ぶ～

①詩情に合った筆選び。筆の持ち味を生かし、筆の性質を充分に引き出す。

②そのために求められる技術、多彩な用筆法。これは1回目の講演「古典の臨書の必要性」と、つながります。

「筆はどのようにでもなる」「ただ真面目に書いてもだめだ」。辻元先生のお言葉は、大変耳が痛かったのですが、生き生きした作品か、つまらない作品かは、「表現のねらい、筆の選定（筆の持ち味を生かす）、多彩な用筆、造形力、構成力、気持ち」にかかっているのだと改めて学ばせていただきました。

辻元先生の揮毫により、参加者ひとりひとりの作品は、命を吹き込まれたかのように響きあい、動き出す様子に感動し、ただただ心が震えました。揮毫する様子を拝見できるしあわせを身体いっぱいに感じながら、先生の作品制作するときのエネルギーや、参加者とじっくり（作品について）語り合うお姿についても、感銘を受けました。

辻元先生のお話の一つひとつに、また、筆を執られた時の真剣なまなざしや躍動する筆の動きに、全身全霊で「書」に向き合って来られた人生や、指導者としての姿勢も見せていただけたこと、間近に見る一流の書人ならではの情熱に圧倒される一日となりました。

（川村　美泉）

辻元先生の範書（1）

講演会でのひとこま

熱心な参加者

範書（2）

範書（3）

古典鑑賞 ㊹

争坐位文稿（顔真卿）②

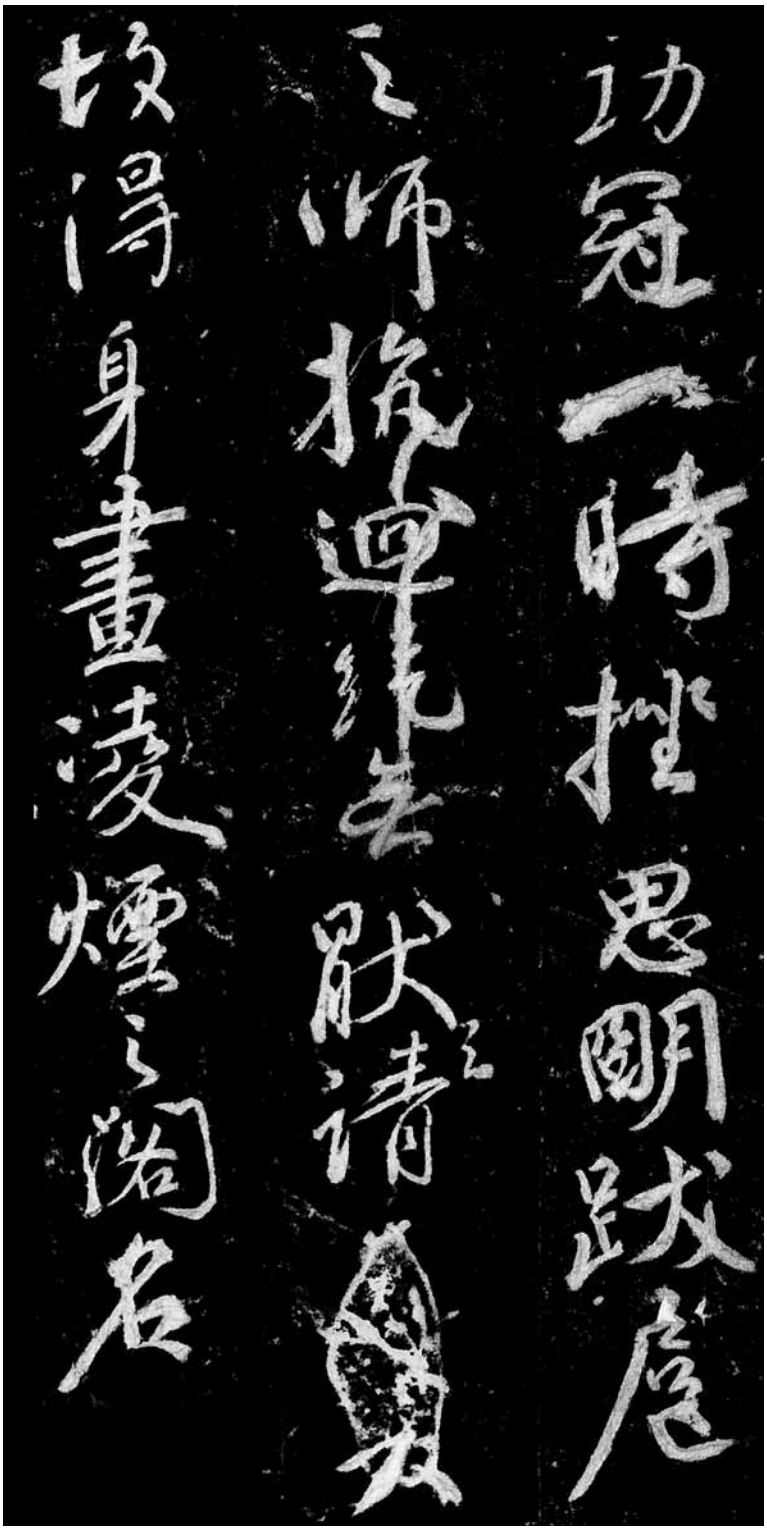
※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）

〈解説〉『争坐位文稿』について上田桑鳩は、変化の多い形や線が複雑な旋律を持っていると述べている（創元社『臨書入門』）。また、ねじこんだり、ねじた筆が強く盛り上ってくるように書いてある、とも指摘する。

運筆は穂先をかくした蔵鋒で渾朴な線を書くことが肝要であるが、その起筆について2種類の方法がある。縦画はAとB、横画はCとD。

A＝上からおっかぶせるように突き込む
B＝下から穂先を入れて折り返す
C＝左下から突きあげて穂先を線の中に隠す
D＝右から逆に突き込んでから隠す

（編集部）



功冠一時。挫思明跋扈／之師。抗迴紇無猒之請／故得身畫凌煙之閣。名

※2行目最下部は書かなくてよい

（三井記念美術館蔵）

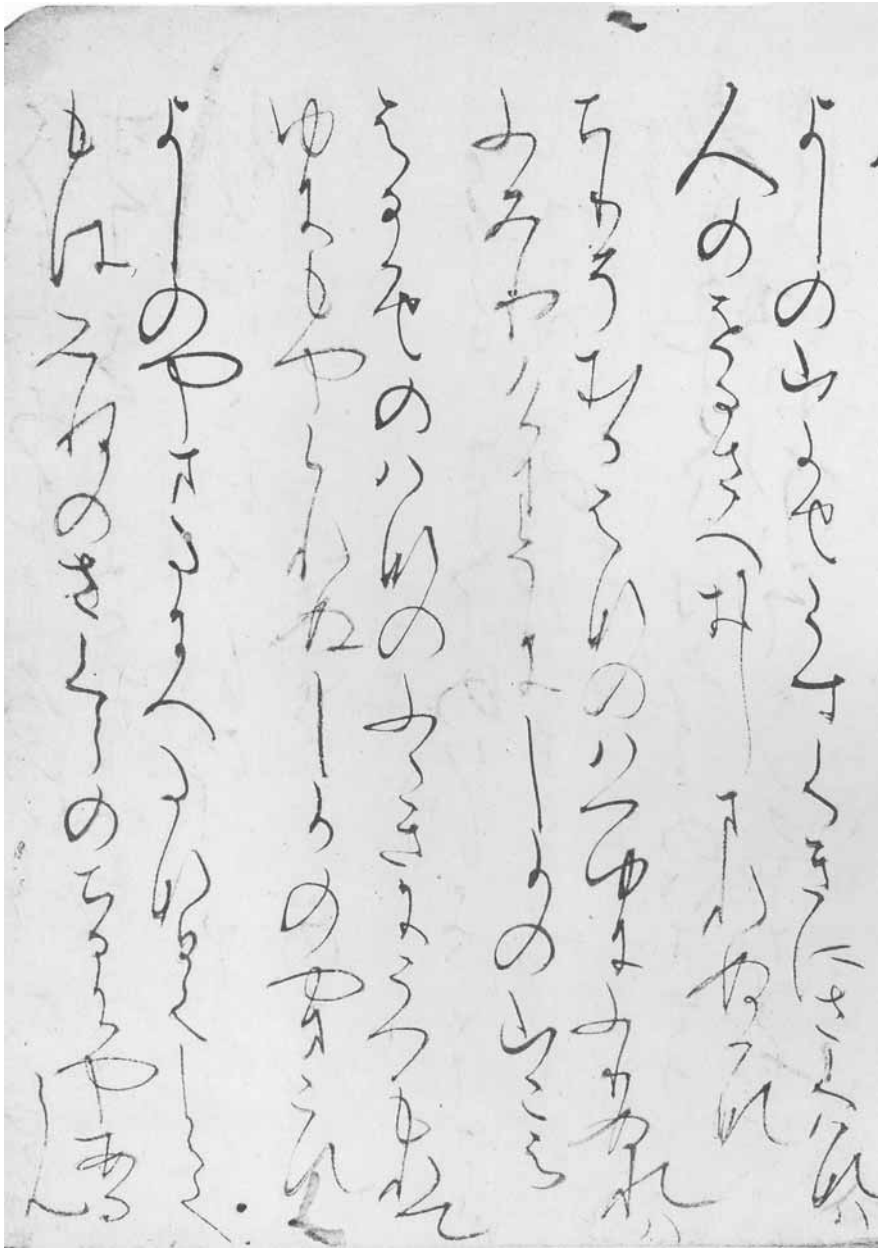
※掲載図版原寸、ただし行立てについては変更しています

漢字研究部臨書課題	（半紙普通判・縦使用）上記掲載部分より何文字臨書してもよい。
特別研究部臨書課題	（A．大作の部―毎日展審査会員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可 B．小品の部―半切½以上半切以内、全紙½以内も可（A・B縦横自由）） 当該古典の上記掲載部分以外も可。

古筆鑑賞

㉘ 山家心中集（伝 西行筆）②

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）



※古筆は原寸（以上も可）で臨書しましょう。なお、掲載図版は原寸です。

〈よみ〉

よしの山かぜこすくきにさくはなは
人のをるさへおしまれぬかな
ちりそむるはなのはつゆきふりぬれば
ふみわけまうきしがの山ごえ
はるかぜのはなのふゞきにうづもれて
ゆきもやられぬしがのやまごえ
よしのやまたにへたなびくしらく
もはみねのさくらのちるにやあるらむ

〈解説〉西行の歌集に『山家集』があるが、それを抜き書きしたものがこの『山家心中集』であり、それに歌を足して成立した『西行上人集』というものが別にあると説明されている。

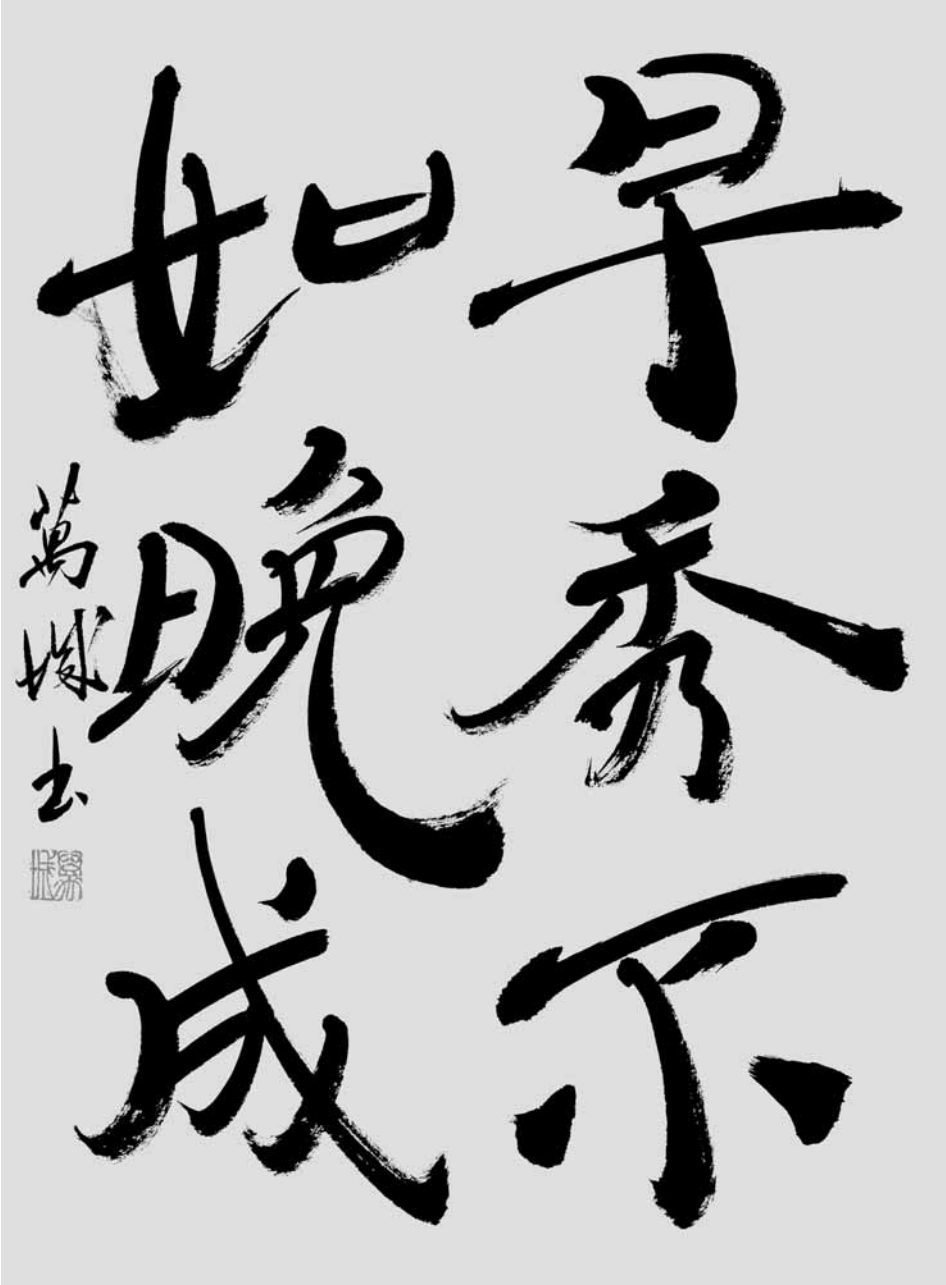
本文2行目「おし」は定家かなづかいであり、歴史的かなづかいであれば「をし」になる。西行や定家などこの時代の歌人の歌で創作する場合は必ず活字本で確かめる必要がある。

さて、この古筆の臨書では側筆が基本となる。行の出だし（書き始め）では筆管を手前に倒しておき、運筆に従って立ち上げてゆくのがコツであるが、なかなか難しい。（編集部）

かな研究部臨書課題	（半紙普通判（**料紙可**）・**縦長**に使用）別紙を裁断して貼付も可。半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。上記の古筆の掲載部分より**歌一首以上を書く。（全臨も可）**
特別研究部臨書課題	A．大作の部＝毎日展審査会員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可 B．小品の部＝半切⅓以上、半切以内（縦横自由）、全紙½以内も可 ＜いずれも上記の掲載以外も可。＞

漢字規定 初段以上【12月10日締めきり】用紙 半紙普通判

種谷萬城選書



早秀不如晩成　よみ（早秀は晩成に如かず）

書体＝自由

習い方解説 (2)

種谷萬城

早秀不如晩成　（菜根譚）

（早秀は晩成に如かず）

早秀（早く熟するもの）は晩成（遅くゆっくり実るもの）に及ばない。

今月も『菜根譚』中の語句です。漢簡を参考にして書きました。20世紀初頭に、中国西域の遺跡から、肉筆文書である漢代の木簡が多数発見され、その後の発掘調査で、中国各地から簡牘が大量に出土しました。漢簡には、筆の穂先の開閉を自在に用いた、生命感に溢れる躍動的な線が見られます。特に装飾的な波磔（はたく）には、多彩な表情があり、大変魅力的です。左の作は漢碑に見られる八分隷で書きました。比較参照して下さい。

〈参考〉

漢字規定 秀級以下【12月10日締めきり】用紙 半紙普通判

西川翠嵐選書

浮雲驚龍　よみ（浮雲驚龍）

書体＝楷書

習い方解説 (2)

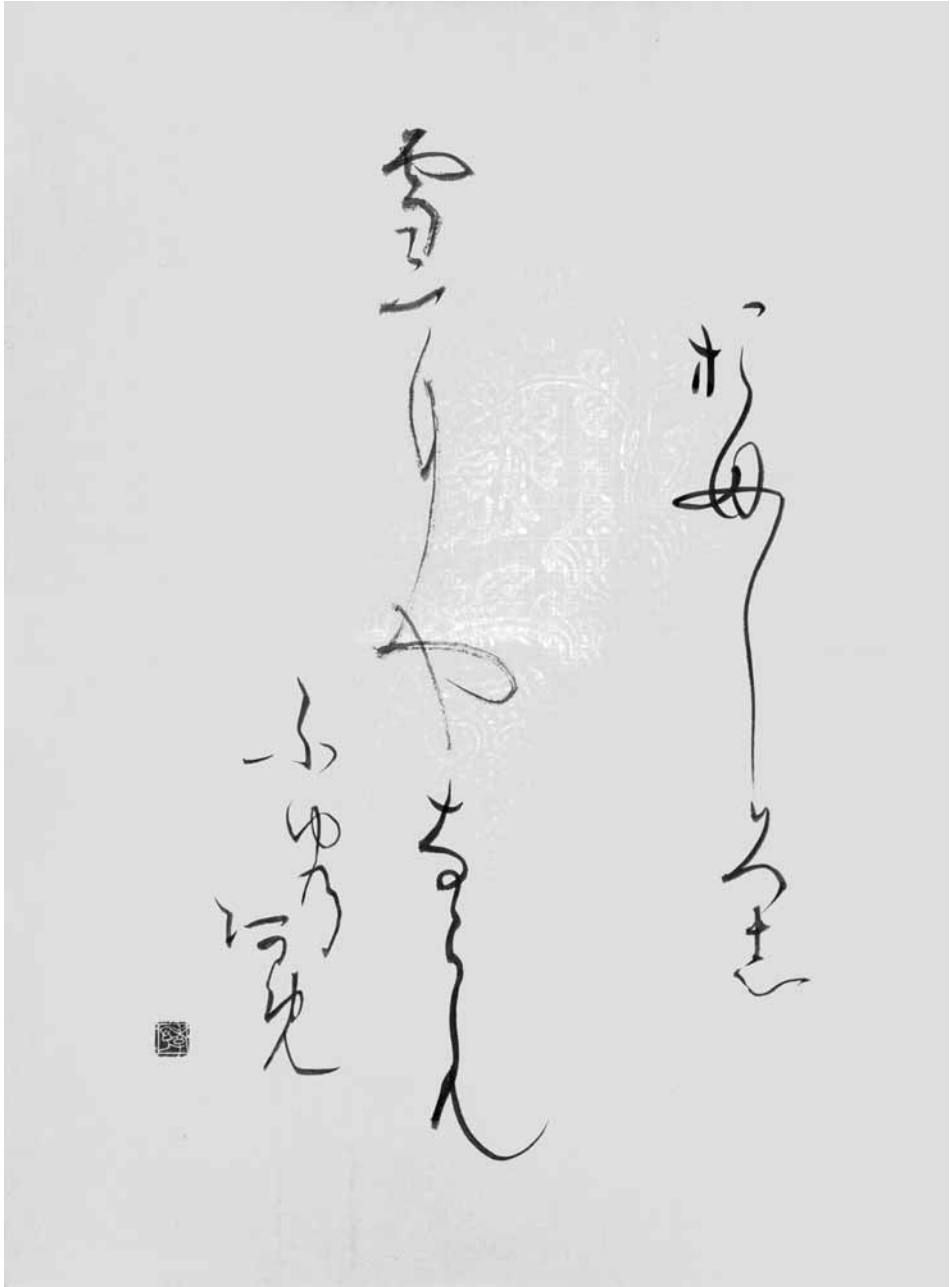
西川翠嵐

浮雲驚龍　（晋書）
（浮雲驚龍）
筆勢の伸びのびとして力強い様子。

皆さん良くご存知、書聖王羲之の書を評した言葉。有名な魏志倭人伝もその一つである中国の「正史」は二十四史とも呼ばれ、古代から明朝までが清の乾隆年間に成立しました。一つの王朝がほろぶと次の王朝によって書かれます。この「晋書」も唐の時代王羲之を深く愛した太宗の時に房玄齢らによってまとめられました。全百三十巻のうち「列伝」巻八十が羲之です。「その書は飄然として浮雲のように自由闊達であり、力強さは飛び上がろうとする龍のようである。」と伝えます。左側に画数の多い字が並びましたが、「雲」「驚」の2字は上部と下部のバランスに気をつけて書いて下さい。別に「游雲驚龍」という熟語もありますがこちらは羲之の容姿をたとえたものです。

かな規定 初段以上【12月10日締めきり】用紙 半紙普通判（料紙可）

小島孝予選書



よみ方 面(於母)白(しろ)し(志)雪に(耳)やな(奈)らん冬(ふゆ)の(乃)雨(阿免)

創作

＊料紙は半紙版(33.0×24.5㎝)を使用しましょう。半懐紙は上記のサイズに切って下さい。

習い方解説 (2)

小島孝予

面白し雪にやならん冬の雨

（松尾芭蕉）

面白いなあ。雪になるかもしれない冷たい雨が降ってきた。

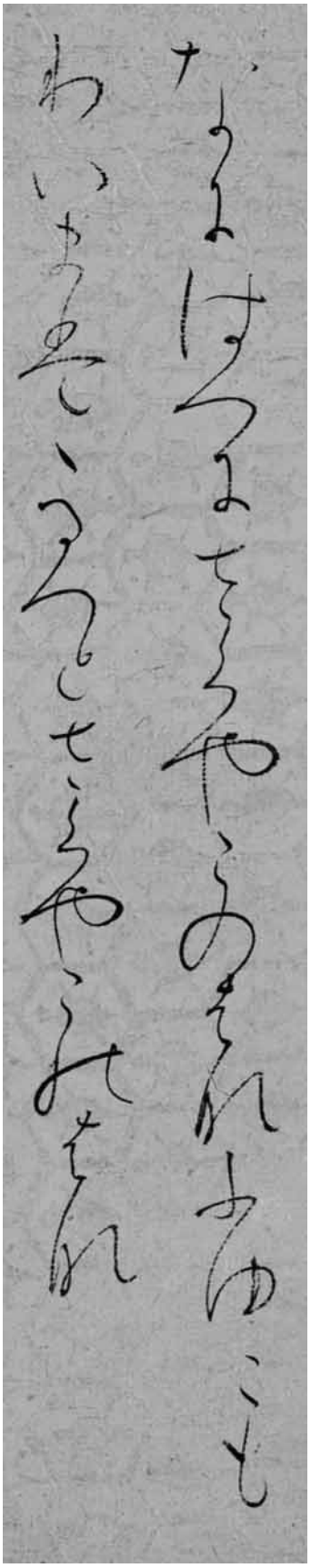
松尾芭蕉（1644～1694伊賀・上野の人）は宗房・桃青とも号した。初め貞門の季吟に学び、後に談林俳諧に属すも、やがて蕉風俳諧を確立。数々の俳諧行脚を経て大成した。有名な『奥の細道』など、江戸時代前期の俳諧師である。

「雪」だけを漢字のままにし、その他は簡素な変体がな・平かなを使い、句意の静寂さ・素朴さを表現しました。

「ならん」で墨継ぎをすることによって、下部に重量感が出ます。そして「ふゆのあめ」をひと固まりとして小さく細めに軽快に書くことで「ならん」とのバランスが取れ、全体の景色が生まれます。

かな規定　秀級以下【12月10日締めきり】　用紙　半紙タテ$\frac{1}{2}$（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真の和歌を臨書する。部分臨書も可。〈注〉署名は「〇〇臨」。　粘葉本和漢朗詠集（掲載写真拡大120％）

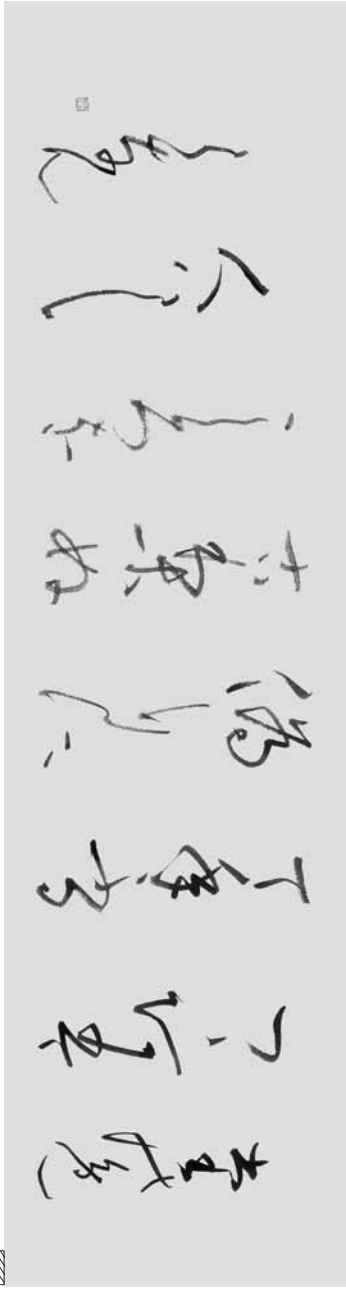


よみ方　なにはづにさくやこのはなふゆごもりいまはゝるべとさくやこのはな

歌意　難波の渡し場に咲く、この花々よ。冬ごもりのあと、今はもう春になりましたとばかりに盛んに咲いている、この花々よ。

かな条幅規定【12月10日締めきり】　用紙　小画仙紙半切（料紙可）

佐藤希雲選書



よみ方　頼(堂能)め(免)つつ(ゝ)逢(阿)は(盤)で年経(ふ)るいつは(偽)りに
こ(古)り(梨)ぬ心(こゝろ)を人は(八)知(し)らな(奈)む(无)

創作

※ヨコ形式に限る

出品券貼付位置

習い方解説 (2)

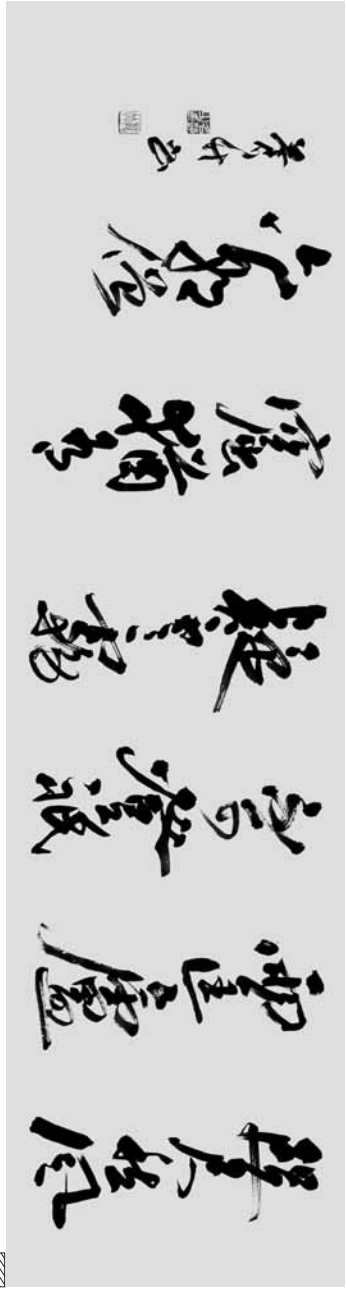
佐藤希雲

頼めつつ逢はで年経るいつはりに
こりぬ心を人は知らなむ
（凡河内躬恒「古今集」）

期待させられながら何度も裏切られてきたけれど、それでも恋人の来訪を待つという女性の思いを代弁した躬恒の歌です。

平凡な構成ですが、中央に漢字や繁画の変体がなを配置し盛り上げます。行間のバランスも大切です。墨継ぎは「人」で行いましたが、強くなりすぎないようにしてください。

漢字条幅規定　初段以上【12月10日締めきり】　用紙　小画仙紙半切



名越蒼竹選書

咫尺愁風雨　匡廬不可登　祇疑雲霧窟　猶有六朝僧
（錢起）
（咫尺風雨を愁い　匡廬登る可からず　祇だ疑う雲霧の窟　猶お六朝の僧有らんかと。）

書体＝自由

出品券貼付位置

漢字条幅規定　秀級以下【12月10日締めきり】　用紙　小画仙紙半切

川島舟錦選書

雲散月明誰點綴　天容海色本澄清
（蘇軾）
（雲散じ月明らかにして誰か点綴せん　天容海色本より澄清なり）

書体＝自由

習い方解説 (2)

名越蒼竹

今月は半切横形式のまとめ方の一方法を考えます。20字の課題では字間と行間を揃えてしまうと散漫な感じになってしまいますから、隷書体は字間、行草体は行間を広く取るのが基本です。その分、行草書では字間をうんと詰め、時折左右に広げる点画を数カ所配するとよいでしょう。横形式の行間の取り方は張瑞圖から学べます。

※ヨコ形式に限る

習い方解説 (2)

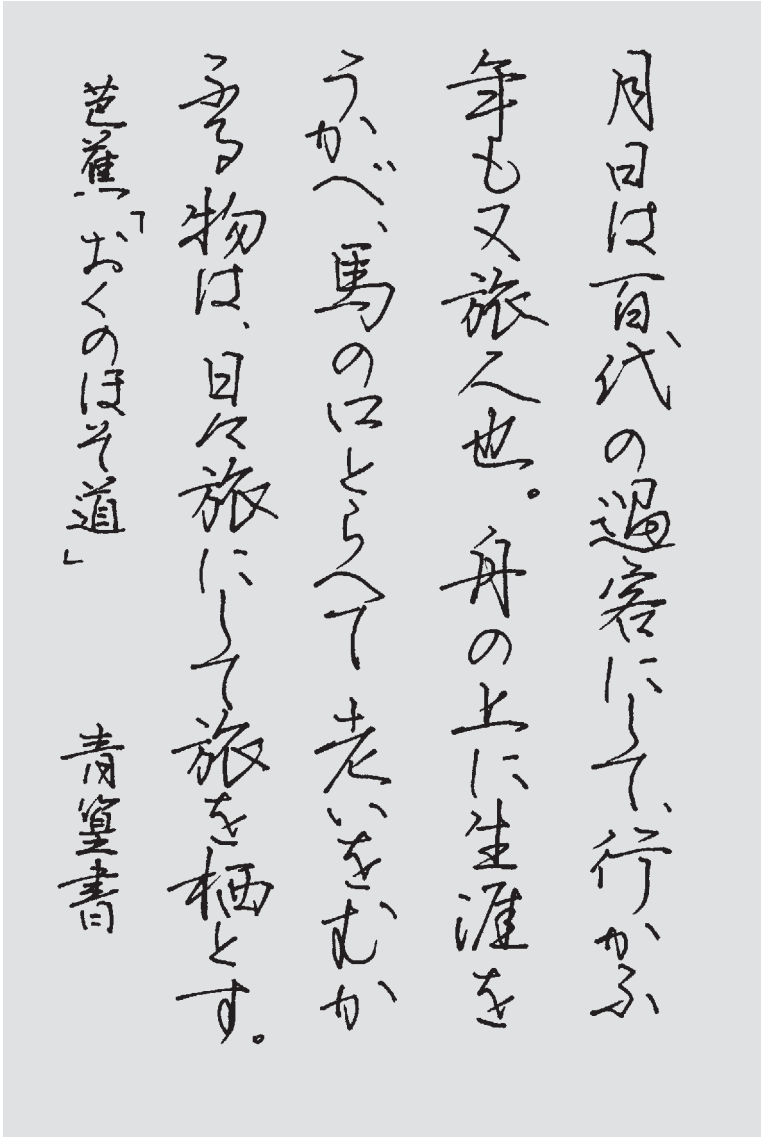
川島舟錦

行書は楷書に比べて、線の緩急、抑揚などが分かりやすく、書き手の意図や作品から受ける趣きをとらえやすい書体です。

「楷書は、立つが如く、行書は行く（歩む）が如く、草書は走るが如し」と、書体を動作にたとえたものもあります。書写的な行書です。リズムや気脈を大切に、のびやかに筆を運んでみましょう。

ペン字規定【12月10日締めきり】

東福青篁選書



◇用紙　ハガキ大（14.8×10㎝）の白紙を使用
◇黒インクのペンを使用（ボールペン・フェルトペン可）

書体＝自由

ご注意!!

用紙の大きさにばらつきが見られます。
用紙サイズ（ハガキ大14.8×10㎝）を守って下さい。

習い方解説 (2)

東福青篁

『おくのほそ道』は有名な「古池や蛙飛びこむ水の音」を詠んだ俳人松尾芭蕉が、奥州や北陸に旅した体験を数々の名句でまとめた紀行文です。中国の詩人李白の『春夜宴桃李園序』の「夫れ天地は万物の逆旅なり、光陰は百代の過客なり」の冒頭の一節を下敷きとしています。

声に出して読み上げてみましょう。響きのある文章のリズムやテンポが心地よく感じられると思います。字数の多い課題ですので、2・3字の続け方を意識しながら練習を重ねて下さい。

月日は百代の過客にして、行かふ
年も又旅人也。舟の上に生涯を
うかべ、馬の口とらへて老いをむか
ふる物は、日々旅にして旅を栖とす。
芭蕉「おくのほそ道」　○○書

実用書　【12月10日締めきり】

喪中につき新年のご挨拶を
失礼させていただきます。
生前に賜りましたご厚情に深謝致
すとともに、皆様のご多幸をお祈り
申し上げます。
令和六年十一月
長島千加子

長島僊雨書

喪中につき新年のご挨拶を／失礼させていただきます。／生前に賜りましたご厚情に深謝致／すとともに、皆様のご多幸をお祈り／申し上げます。／令和六年十一月／氏名

書体＝自由

（掲載手本85％に縮小）

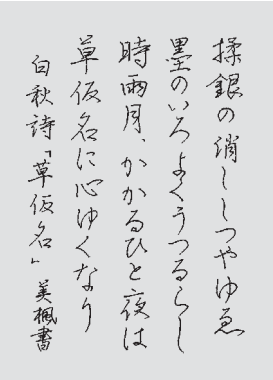
◇小筆・筆ペン・サインペンなどを使用　署名は各自の姓名（号）を
◇用紙は普通版半紙横½（24.5×16.5㎝）　B５版コピー用紙（26.0×18.1㎝）も可
◇所定の出品券を作品の右下に貼る

今月のホープ作品・各部総評　NO.761

ペン字部　師範　奥村　美楓

自然な運筆で横線が統一され加えて字間が正確で瀟洒な趣きを感じる。控え目であるが魅了される。

◎ペン字部総評　字形は勿論だが、紙面の中で整合性を持つことも必要。全体のバランスを書き込んで身につけましょう。（雪枝評）



かな条幅部　準師範　岩瀬　祥園

かなり大胆に筆が動き、墨への配慮も的確で華のある作品。動くだけに騒々しくならないように！

◎かな条幅部総評　上段の方は比較的見応えのある作が多かった。かなの加工紙は多彩なため吟味が必要、滲むものは不可。（洋子評）

漢字条幅部　師範　鈴木　英晴

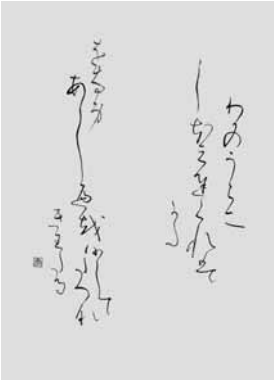
筆が紙面を自由闊達に走る様子はお見事。日頃の作品創りがここに生きる。流暢な作品に脱帽。

◎漢字条幅部総評　20文字の条幅作品は、表現が難しいです。楷書単体・行草との書きぶりの違い。色々研究するのも一つ。（藤扇評）

かな部　師範　田畑寿美子

強弱のリズム感が心地良く、行間の変化、各行の長さが余白に響き作品の格調を高くしている。

◎かな部総評　墨量の変化の乏しい作品が散見。作品の奥行き、立体感を出すには潤渇の変化は大切な要素です。（峰子評）



現代詩文書部　特選　坂本　芳博

紙面全体を見事に捉えた構成が見事。深く沈み込む潤筆線を多様し時折り見える渇筆線が見事な作。

◎現代詩文書部総評　多種多様な構成に感服。構成や文字等に凝らし過ぎが散見されるが。（無極評）

漢字部　師範　鷲山　美梢

運腕大きく、健康的で巧みな筆捌きが魅力的。抑揚の変化から生まれる余白が輝きを見せた傑作。

◎漢字部総評　作品制作にあたっての気概が大切。特に上級者は多書することで生まれる格調の高い作をめざしてほしい。（石雲評）

前衛書部　特選　岩上　郁子

思い切った構図と余白、幾重に重なる細線と中央の滲む点が印象的な明るい作品である。

◎前衛書部総評　多種多様な構成と空間を考えた力作が多く見応えがあった。（蓮紅評）

実用書優秀作品

選評　児玉　韜光

令和六年の二十四節気

五月五日　立夏　二十日　小満
六月五日　芒種　二十一日　夏至
七月六日　小暑　二十二日　大暑
八月七日　立秋　二十二日　処暑

金城智子

特選　金城智子

紙面に合致した文字の配置、字形の正確さで好感を与える作品です。

令和六年の二十四節気

五月五日　立夏　二十日　小満
六月五日　芒種　二十一日　夏至
七月六日　小暑　二十二日　大暑
八月七日　立秋　二十二日　処暑

岩上郁子

特選　岩上郁子

漢字・かな（ルビ）の字形、点画での筆の使い方が魅力的な作品です。

◎実用書部総評

告知などをした時に、一目見て注目を引く作品が多く見られた。漢字・ひらがなの字形の正確さに欠ける作品もあった。入落は僅差。（韜光評）

特選

附中　金城智子
高真　岩上郁子
澄春　新行内芳蘭
大雲　鷺山美梢
福山　徳永裕子

秀作（60音順）

八街　虹川良子
洞書　安藤楊風
啓佳　春日裕子
ここ　加藤翠陽
梓江　佐藤祥扇
四枝　丹　美枝
幸扇　中村　高子
春汀　中山知子
もく　本郷谷恵
大雲　渡辺妙華

佳作（60音順）

紅瑤　相澤敦子
もく　青木藤遶
弘舟　大野木雅風
立精　菊地白雅
八街　小杉悦子
水茎　清水蘭舟
香書　須賀澤一起
立精　千田白香
大雲　積田雅雲
書泉　永井伯泉
墨遊　西川絹子
はせ　長谷久子
紅瑤　廣戸美岐
佑朋　宮木淳子
青蓮　山﨑　恵

入選（60音順）

唯一　逢沢唯一
千葉　安藤叙孝
紅瑤　井艸明子
春汀　池田美津子
及川明美
上里　大澤よし子
生大　太田良子
青蓮　小野朱星
倉吉　北爪鼓祥
こだ　宮下樂翠
芳蘭　木村房翠
蛍雪　小池稔子
清月　小林嘉江
梓江　権代雪華
素雪　坂本芳博
常盤　水津恵風
富貴　菅原昌子
若美　鈴木裕美子
紅瑤　高木百合子
深大　竹清汀琴
多胡三千代
岱翠　田中勝見
五月　谷元光子
天満　田畑明琴
生大　田村春華
倉吉　鳥山千恵里
文月　仲川信夫
天璋　中里星子
〃　中里亮子
幸扇　野村幸城
洞書　濱田竹雪
琇韻　林美奈子
長月　原澤典子
八街　保谷美芳
若美　松本麻衣子
文月　三浦真翠
生大　宮下樂翠
宗苑　茂木絢水
楓会　吉田裕
八街　渡辺節子

（選外362名氏名略）

現代詩文書部（特選）

選評　佐藤無極

美梢　沈着した線に気魄が籠る
祥舟　筆勢が漲り躍動感溢れる
藤象　気脈一貫した爽やかな作
雅芳　筆勢厳しく躍動感溢れる
恵弦　気宇雄大筆勢に気迫感ず

翠里　素朴な運筆で詩情を謳う
久仙　骨力ある線が紙面を躍る
真理　構成の妙余白が美しい
李花　強靭な線が紙面を舞う
淳子　筆勢が漲り躍動感溢れる

永舟　淡々として味わい深い作
萩雨　線勁く穂先の開閉が見事
慶子　錬度高く躍動感溢れる
千苑　鍛錬された線が魅力の作
京華　気脈一貫充実感あり

梨秀　衒いのない自然な運筆
佳子　大胆な構成が余白に響く
聞美　独特の運筆、表情も豊か
菜圓　紙面構成見事に捉えた作
雄一　運腕大で骨ある線籠る

前衛書部（特選）

選評　太田蓮紅

加奈子　重なる線に墨色の遠近感
紫千　構成、躍動感、見事融合
千晶　切れ味の良い線と躍動美
雅悠　宿墨の美と力強い線圧巻
美奈子　濃墨潤渇の表現、迫力有

倫果　揺れ動く線が魅惑的な作
菜圓　宿墨美と静動線のコラボ
初江　深みある潤渇線が冴える
梨秀　線と構図を巧みに融合
奎山　墨色の遠近感、余白美有

今月の

特別研究部優秀作品（特選）

選評　下谷洋子　種谷萬城　白石和楓　北村白琉

小品の部

前衛書（華芳社）
庄司紫千
「おもむくまま」

庄司紫千書

135×35㎝

◆超濃墨の黒々とした墨色と渇筆のシャープな対比が冴えて、余白の白が美しく映える。魅力あふれる佳作。（白琉評）

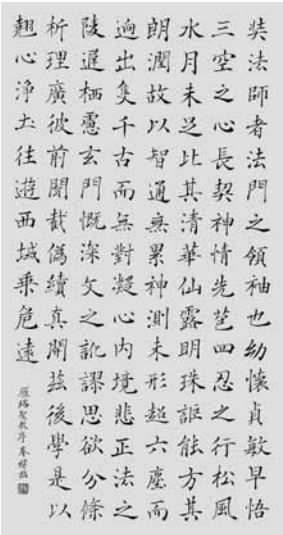
臨書（大雲）
舟寶恵美
「雁塔聖教序」

135×35㎝

舟寶恵美臨

◆一点一画、線の表情を捉えて、筆法を工夫し、丹念に書かれている。細やかな神経、感受性の高さが窺える上質な臨書作品です。（萬城評）

臨書（東総）
薄田春緑「雁塔聖教序」



89×47㎝

部分拡大

◆章法が的確。剪装本ではなく整拓を着実に鑑賞している。字粒が揃い、字間、行間の余白が正確である。一字一字の書法も錬度が高く美しい。（萬城評）

薄田春緑臨

現代詩文書（蒼風）
笹木蒼風
「富弘詩」

67×35㎝

◆濃墨でゆっくりとした筆運びの渇筆に、墨の入った字が見事にマッチしていて良い。上下に分けてはいるが、バランス良く、自然体で安定感あり。（和楓評）

笹木蒼風書

〈小品の部〉

創作の部（42点）
漢字―10点
かな―2点
現代―18点
篆刻―0点
前衛―12点
臨書の部（35点）
漢字―33点
かな―2点

総出品点数 77点

〈特選候補者〉

（創作の部）
「漢字」
八街井ノ口春峰
水茎高岡秀汀
蒼原佐藤奎山

「かな」
上泉早部齋藤杏邑朗
潮音

「現代詩」
植松梅田紅雨
光風絢光水泉
宗苑茂千木葉
四枝奥川北嶋
菁湖西川藤菁象湖流
もく

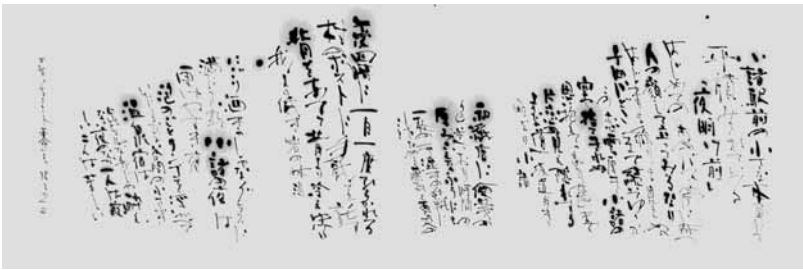
「前衛」
蓮紅大友紅美雪蓉
蓮拙本田阿部俊吾

（臨書の部）
「漢字」
大澄八華もたく小八
阪春街祥か映街
土三小岡浜豊相
屋浦泉部野嶋楽
恵英　藤永　天
仙樹潤瓊篁勝翔

「かな」
四谷佐
千葉猪藤又
理詠
扇子

大作の部

現代詩文書　（玄穹）　千葉陽子　「万智のうた」



千葉陽子書　60×176㎝

◆滲みのきいた字に寄りそうが如くの見事な変化のある細線が綺麗で、全体の構成も素晴しく明るい。落款を一考されては？（和楓評）

漢字　（もくせい）　青木藤漣　「遠眺」

青木藤漣書　43×163㎝

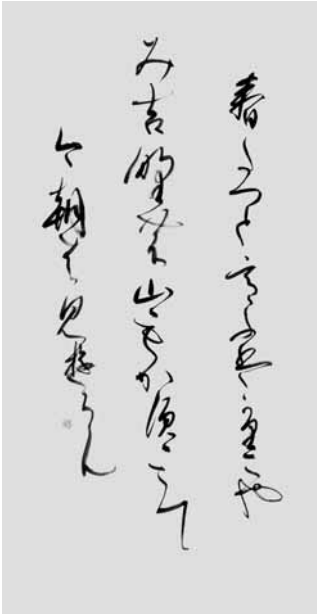
◆無理のない自然な構成で横作品として品良く仕上がった。随所に蔵鋒を用いた線に深味がある。余白も美しく錬度が高い。（萬城評）

前衛書　（玉州）
遠藤和香
「閃光」

遠藤和香書　180×60㎝

◆上部の滲みを効かせた墨塊が、中央で勢いを得てダイナミックに展開し、軽やかに下部へ向かい収束する。造形も筆勢も見事な、気宇の大きな作品。（白琉評）

かな　（伊呂）　鈴木英晴
「壬生忠岑のうた」



鈴木英晴書　137×70㎝

◆オーソドックスな構成だが、温かみのある柔らかな線が嫋やかに流れ、見る者の心に溶け込む。慈味深い作品の好例。（洋子評）

〈大作の部〉

創作の部（28点）
漢字―5点
かな―3点
現代―6点
前衛―14点
臨書の部（6点）
漢字―5点
かな―1点

総出品点数 34点

〈特選候補者〉

（創作の部）
「漢字」
創珠　阿部　珠翠
もく　森田　藤谷
「現代詩」
翠苑　佐々木豊苑
玄穹　尾形　紅霞
「前衛」
光風　千葉　光龍
蓮紅　小野寺洙紅
篤信　三浦　朱鳳
紅瑤　竹内　成美
紅瑤　廣田　紫
容洲　阿部　邑里
青蓮　大町　菜圓
月華　相馬　朱郷

（臨書の部）
「漢字」
英峰　佐藤　桂香
紅瑤　相澤　敦子
素雪　坂本　芳博

漢字研究部
（雁塔聖教序）

選評　川島舟錦

今月のホープ作品

坂井初江

漢字研究部　特選　坂井初江

審査最終に、よくできている作品6枚を、壁面に貼ってみました。線質が深いので力強くのびやか、最も躍動感あふれる作品として選びました。『初江臨』としてほしかったけれど入らなくて仕方のない選択か…。

◎漢字研究部総評

気候変動などに翻弄されながら、長い猛暑をやっと乗り越えました。たくさんの作品を審査し終えるころには、日頃の鍛錬から生まれた、精彩に満ちた躍動感あふれる渾身の作品に出合うしあわせを感じることができました。

緩急、太細、強弱など、洗練された細線は変化に富み、かつ上品な面持ちです。行書的な用筆、抑揚が利いた流れるような筆脈を表現するのは難しかったはずです。

小樹　友香里　美梢　天翔　紅雨　敦子

理恵　里佳　幽香　雅澤　雄悠子

良章　琴燁　良風　泉華　恵芳　信代

一義　朱葉　里奈　京子　祥園　きみ子

かな研究部
（高野切第三種）

選評　庄司紅邨

今月のホープ作品

坂本里美

かな研究部　特選　坂本里美

連綿の流れに気を配り筆先に力を込めた作品です。曲線を意識しながら高野切を追求しました。おだやかな線の中にも美しい変化が見られました。

◎かな研究部総評

第三種は古筆の臨書の基本ですからできるだけ原寸で書きましょう。全体的に見るとかなの起筆と終筆をおろそかにせず細かい部分も表現して欲しいです。

佳恵　和美　芳子　ちえ子

寿美子　朗子

洋子　竹鈴　雪蓮

紀舟

かな研究部成績表

特選

◎坂本里美

秀作（60音順）

蔥桜書草代美恵　堺高紅橋紅石高玉青正清上紅上素清竹書八五三和佳恵　澄澤澤　蔥崎井瑤雅瑤習井川蓮華月泉風泉雪月美泉木橋紀舟美　藍青新石石磯貝　澤木井知　木粕鈴深岡石吉伊須松榎大熊柴徳早田塚坂境七木野紀　紅瑤月　村谷木澤村田田木百田丸田谷谷田江部畑本ち芳和　　　

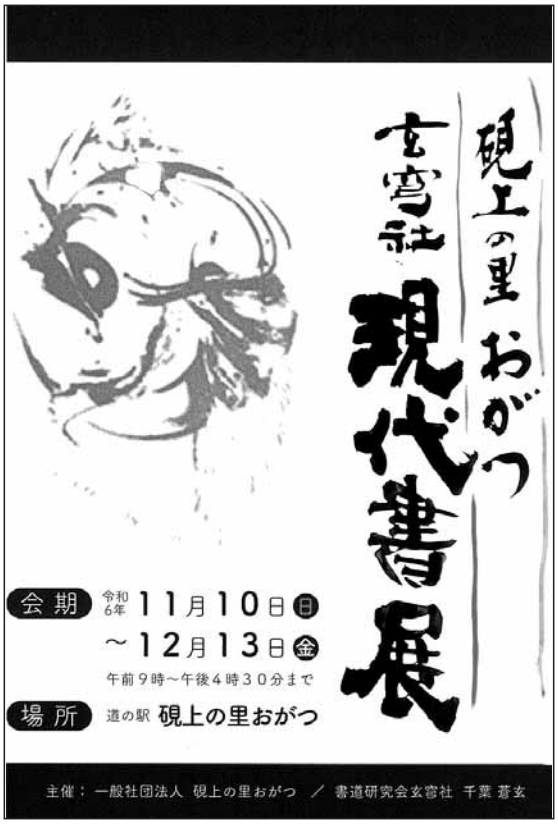
第17回
世界夢一文字コンテスト

～今年の目標・夢の達成へ向けて
漢字一文字をハガキで表現～

〈作品募集〉
令和６年12月１日㈰～12月31日㈫
〈必着〉

〈作品展示〉
- **令和７年３月中旬～４月初旬**
  ８：00～18：00（最終日15：00まで）
- **大分空港２階出発ロビー**
  令和７年４月初旬～５月初旬
  ９：00～20：00
  ホテルベイグランド国東

●主催　国東半島あいルネサンス連盟
（連盟会長）**松井督治**（国東市長）
（連盟副会長）**牧　泰濤**



〈編集部からお知らせ〉

- 総ページ数の関係で、本号の「令和の群像」は休載させていただきました。12月号に３名掲載する予定でいます。
- １月号から、新企画「新鋭礼讃（しんえいらいさん）」を始めます。本院の若手にお願いして、執筆していただきます。作品発表の良い機会になればと考えています。
- 12月の競書の締切りは**10日（火）必着**です。お間違いのないようにお願いします。

昭和五十年一月二十七日第三種郵便物認可
令和六年十月二十五日　印刷
令和六年十一月一日　発行
（毎月一回一日発行）　書道芸術　第七六三号

●篆刻
【12月10日締めきり】

〈出品規定〉

①篆刻　㋐課題による語句
　　㋑原印自由
　　（出品の際、原印のコピー添付）
②創作　語句自由

○印面の大きさは2.3㎝（八分角）以内とし朱文、白文自由。
○印箋は市販のもの、半紙横½の大きさに切ったものも可。
○応募は①か②のどちらかとする。

11月号　篆刻課題

〈原印コピー〉

齊白石

「借山門人」

◉出品方法

用紙の右側に押印し、左側に印影の釈文を明記、並びに落款（氏号）を入れる。

761号篆刻優秀作品

選評　後藤大峰

篆刻特選　成田能喜

「知己有恩」

細部にわたり佳く原印を観察し確実に臨摹されている。運刀、見事。

創作特選　中畠義則

「鳥鵲南飛」

印面全体を無理なく使いバランスよく構成した。線質はもう一息。

（篆刻）

特選　石心　成田　能喜

秀作（50音順）　大雲　小沢　華仙　蒼原　庄司　櫻空　白琉　平塚　由香　生大　吉原　進

佳作（50音順）　大網　片岡　豪峰　大雲　鷺山　美稍　石心　山道　蓉泉

入選（50音順）　丸山　加藤　妙子（選外なし）

（創作）

特選　生大　中畠　義則

秀作（50音順）　やま　橋本　清麗　粋仙　藤井　龍仙

佳作（50音順）　秀恵　阿部　雅悠　八街　新村　翠芳　趙雲　吉田　恵弦

入選（50音順）　唯一　逢沢　唯一　遊雲　赤星　文庵　游水　荒川　裕泉（選外なし）

◎篆刻部総評

今月も作品数が大分、少なくなりました。是非、お一人でも多くの方々の意欲的な作品を期待します。中には秀作もありました。（大峰評）

今月の注目作

橋本清麗

「和神養素」

◎郵便物・清書・送金・一般事務等は

〒101-0031
東京都千代田区
東神田1―16―7
東神田プラザビル3階
公益財団法人　書道芸術院
電話（03）3862―1954
FAX（03）3862―1957

ご連絡等は月曜日～金曜日　10時～16時の間にお願いいたします。（土・日・祝日は休み）

送料

1か月の購読部数が1部～9部までの1回の郵送料

1部	79円
2部	95円
3部	103円
4部	119円
5部	135円
6部	151円
7部	167円
8部	183円
9部	199円

10部以上は送料免除

令和六年十月二十五日印刷
令和六年十一月一日発行
定価　1部　七五〇円
編集兼発行人　下谷洋子
データ処理　株式会社リンクス
印刷　小沢写真印刷株式会社
発行所　公益財団法人　書道芸術院
〒101-0031
東京都千代田区東神田1-16-7
東神田プラザビル3階
電話（03）3862-1954
FAX（03）3862-1957
振替　00150-4-135058
ホームページアドレス　http://www.iincs.co.jp/shogei/